

優秀修士論文概要

同性愛に対する態度が形成されるプロセスの検討

—— 内在化に注目して ——

岸 航 平

はじめに

今日では状況は改善しつつあるものの、同性愛者は依然として様々なストレスにさらされている (Meyer, 2003)。その背後には、Herek (1995), Herek et al. (2009) により提案された異性愛中心主義があると考えられる。異性愛中心主義は、非異性愛を否定するイデオロギーであり、個人から文化にいたるまで、様々なレベルで社会に遍在している。個人はその社会で生きる中で、異性愛中心主義を自らの価値体系に取り入れる。このプロセスは、内在化 (internalization) と呼ばれる。異性愛中心主義の内在化をもたらす要因として、一部の変数が検討されてきたが、依然として十分に検討されきたとはいえない。さらに、これまでの研究は欧米を中心として行われており、異性愛中心主義の形態が異なる日本においても同様の結果が得られるかは不明である。

そこで本研究では、日本人大学生のサンプルを使用して、養育者と過去に通っていた学校が同性愛者に対する顕在的・潜在的態度に与える影響を検討した。具体的には、過去の養育者、および過去に通っていた学校が性的多様性を尊重していた程度と、回答者の同性愛者に対する態度との相関を検討した。そして、過去の養育者、および通っていた学校が性的多様性を尊重していたほど、同性愛者に対する態度はポジティブであるという仮説を検討した。本研究では、同性愛に対する態度として、質問紙により測定される顕在的態度と、実験課題によって測定される潜在的態度を使用した。また、養育者、学校風土については、回答者に想起してもらい、回答してもらった。本研究では、まず性的多様性に対する養育者の態度、学校風土を測定する尺度を作成した。その後、仮説を検討した。データは、二回の横断調査 (調査1、調査2) と二回の実験 (実験1、実験2) により得た。

方 法

1. 参加者

早稲田大学の学生を対象とした。調査1では日本の中学校を卒業したシスジェンダー異性愛者187名 (女性107名, 男性80名)、調査2では同138名 (男性82名, 女性56名)、実験1では調査1に参加したものの中から31名 (女性17名, 男性14名)、実験2では調査2に参加したものの中から5名 (女性2名, 男性3名) のデータを使用した。

2. 手続き

調査1については、2020年12月から2021年7月にかけて、調査2については、2021年10月から12月にかけて、早稲田大学の講義で参加者を募集した。参加者は質問紙かオンラインフォームで回答した。実

験1, 2については, それぞれ調査1, 2の質問紙・オンラインフォームの末尾で参加者を募集した。実験1は2020年2月と7月から9月, 実験2は2021年11月から12月にかけてリモートで実施した。

3. 調査票の構成

調査票は, 調査1, 調査2のいずれも, 研究の説明, 心理尺度, フェイスシート, 自由記述からなった。ただし, 調査2では, 使用する尺度の構成, フェイスシートに含まれる項目が異なった(後述)。実験1, 実験2については, 実験の説明, 実験課題, これまでに同じ課題に取り組んだ回数, 母語を聞いた。

4. 使用した尺度

①同性愛に愛する態度を測定するため, ATLG日本語20項目版(堀川・岡, 2018)を使用した。②性役割についての平等志向性を測定するため, 鈴木(1994)のSESRA(鈴木, 1994)を使用した。③社会的支配志向性(SDO)を測定するため, 三船・横田(2018)の社会的支配志向性尺度16項目を使用した。②と③はオリジナル尺度の妥当性検討のために使用し, 調査1にのみ含まれた。

④性的多様性に関する認知された学校風土(PSCS)を測定するため, 先行研究を参考に, 23項目からなるオリジナルの尺度を構成した。項目作成にあたっては, セクシュアリティに関わる学校風土を大規模に調査したKosciw et al. (2020), 性的多様性に関する認知された職場の風土を測定したLiddle, Luzzo, Hauenstein, & Schuck (2004)のLGBTCI, 加藤・渡辺(2012)が報告した日本に暮らす当事者の学校経験を参考にした。この尺度は, 23項目が調査1に含まれ, 尺度作成を通じて残った15項目が調査2に含まれた。

⑤性的多様性に関する認知された養育者の態度(PPAS)を測定するため, 先行研究を参考に, 20項目からなるオリジナルの尺度を構成した。Degner & Dalege (2013)でレビューされた, 認知された養育者のレイシズムを測定した研究をもとに作成された。また, 性的多様性に関わる内容とするために, 性的マイノリティに対する態度を測定する尺度を扱う研究も参考にした。作成された20項目を女性の養育者と男性の養育者のそれぞれについて聞いた。調査1には20項目が含まれ, 調査2には尺度作成を通じて残った10項目が含まれた。

⑥フェイスシート項目として, セクシュアリティ(ジェンダーアイデンティティ, 恋愛感情を抱く性, 性的欲求を抱く性, 出生時に割り当てられた性), 年齢, 出身地(市区町村まで), 過去と現在の性的マイノリティの友人の数, 通っていた中学校の公私の別, 養育者の年齢, 養育者の社会経済的地位などを聞いた。これらの変数は, オリジナル尺度の妥当性を検討するのに使用した。

⑦実験には, Nosek et al. (2007)の刺激を用いた「同性愛—異性愛」潜在連合テスト(IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)を使用した。スコアリングについては, Greenwald, Nosek, & Banaji (2003)の D_4 を使用した。

結 果

すべてのデータの要約統計量を算出した後, 調査1のデータを使用して, 各尺度の因子構造を項目反応理論／カテゴリカル因子分析により検討した。

性的多様性に関する認知された学校風土尺度については, 2因子が抽出された。一方は差別的風土と

命名した。この下位尺度は主に教員の差別的発言を測定する6項目からなった。尺度の困難度は高かった。信頼性は $\omega = .77$ とやや低かったが、問題ないとみなした。妥当性については、調査1と調査2のデータを合わせて検討した結果、ATLG、SESRAとの正の相関から示された。心理尺度によらない変数との相関は確認されなかった。

もう一つの因子は、学校や生徒・教員が性的マイノリティに対してインクルーシブであったという認知を測定する9項目からなった。しかし本尺度は、差別を否定しようとする欲求による回答の歪みを免れず、妥当性に問題があると考えられたため、使用しなかった。

続いて、もう一つのオリジナル尺度である性的多様性に関する認知された養育者の態度尺度の項目特性、因子構造を検討した。女性養育者、男性養育者のいずれについても、1因子が示唆された。最終的に、女性養育者用は6項目、男性養育者は女性養育者用尺度と4項目を共有する6項目が採用された。項目の内容からは、性的マイノリティに対する嫌悪や不快感、回避したいという欲求など、ネガティブな態度を測定していると考えられた。困難度は高かった。信頼性については、それぞれ $\omega = .88, .97$ と十分な値を示した。妥当性については、ATLG、SESRAとの正の相関、性的マイノリティの友人の有無との負の相関から示された。

以上で得られた尺度とすべてのデータを使用して、仮説を検討した。心理尺度については、すべて因子を仮定して分析した。相関係数からは、差別的学校風土($r = .41$)、性的マイノリティに対する女性養育者のネガティブな態度($r = .41$)、男性養育者の同態度($r = .35$)のいずれについても、ATLGと中程度の正の相関を示した。すなわち、仮説が支持された。その一方で、IATで得られた D_4 とは、いずれの尺度も相関を示さなかった。こちらについては、仮説が支持されなかった。

また、養育者の態度を独立変数に、ATLGを従属変数に使用した回帰モデルを検討した。その結果、女性養育者の態度は中程度の正の標準化偏回帰係数($\beta = .35$)が確認された一方、男性養育者の態度は標準化偏回帰係数がほとんど0となった($\beta = .07$)。なお、両因子の間には強い正の相関がみられた($r = .78$)。

考 察

以上から、日本においても、差別的学校風土、性的マイノリティに対する養育者のネガティブな態度は、子どもの異性愛中心主義（特に顕在的側面）の形成に関与することが示唆された。これは、欧米における先行研究の指摘とも一致するものであった。養育者の態度を用いた回帰モデルの分析では、男性養育者の態度は、女性養育者の態度との相関を通じてしかATLGを予測しなかったのに対し、女性養育者の態度はATLGに固有の寄与をもったため、後者の重要性が示唆された。これは本研究独自の知見であった。その一方で、同性愛に対する潜在的態度は、こうした要因による影響をあまり受けない可能性が示唆された。

最後に、本研究で得られた知見の応用、および本研究の限界を検討した。性的多様性に関する学校風土や養育者の態度が子どもの異性愛中心主義の形成に寄与するのであれば、それらをポジティブなものにすることで、食い止めることができる可能性がある。本研究の限界としては、横断調査で得られたデータにもとづいた点、オリジナル尺度が回答者の認知を聞いているにすぎない点、過去を想起して回答してもらったため想起バイアスを免れなかった点、サンプルの偏り、日本人に固有の経験を十分に反映した尺度を作成できなかった点、尺度の困難度が高すぎた点が挙げられた。